

2024.6.8



龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

標題音楽の名曲を聴く

プログラム

6月のCDコンサートは「標題音楽の名曲を聴く」と題してお送りします。標題音楽とは「曲の内容を暗示する題や、筋書きふうの説明する文がつけられていて、文学的、絵画的、劇的などの内容を強く暗示しようとする音楽」と定義されています。この標題音楽の対立概念として「絶対音楽」がありますが、こちらは「詩や絵画など他の芸術や、音楽以外の表象や概念と直接結びつかないで音の構成面に集中しようとする音楽」とされています。標題音楽の歴史は古く、バロック時代にもヴィヴァルディの「四季」のような名曲もありますが、一般によく知られているのは、ロマン派の作品です。標題音楽を確立したといわれるのがベルリオーズで、「幻想交響曲」はその代表的な名曲です。さらに標題音楽の発展に重要な足跡を残したのが、リストでした。ハンガリーの生んだ大作曲家リストは管弦楽によって詩的、あるいは絵画的内容を表わそうとする交響詩という形式を創りました。今日はリストの作品の中で最もよく知られている交響詩「前奏曲」を、ハンガリーの名指揮者ヤーノシュ・フェレンチーク（1907～1984）の演奏でお聴きください。近代フランスの大作曲家ドビュッシーは画家や詩人たちから強い刺激を受け、印象主義と呼ばれる新しい音楽語法を確立しました。交響詩「海」はドビュッシーの代表的な名曲のひとつですが、現代を代表する名指揮者クリスティアン・ティーレマン（1959～ ）指揮ミュンヘン・フィルによる、ひと味違ったドビュッシーをお楽しみください。ロシア国民学派「五人組」のひとり、ムソルグスキーの作品で「展覧会の絵」と並んで親しまれているのが交響詩「はげ山の一夜」です。今回お聴きいただくのはロシア出身の名指揮者ヴァレリー・ゲルギエフ（1953～ ）指揮ウィーン・フィルによる、今日最も多く演奏されるリムスキー=コルサコフによる編曲版です。リムスキー=コルサコフは「五人組」の中でも色彩的管弦楽法に優れ、ロシア国民音楽の推進者として貢献しましたが、「千夜一夜物語」を素材に作曲された交響組曲「シェエラザード」は最も広く演奏され、親しまれている傑作です。エストニア出身の名指揮者ネーメ・ヤルヴィ（1937～ ）指揮による演奏でお楽しみください。（中川）

フランツ・リスト（1811～1886）： 交響詩「前奏曲（レ・プレリュード）」

ヤーノシュ・フェレンチーク指揮ハンガリー国立交響楽団
（1982.11.23 ブダペスト、ヴィガドー・コンサートホールでのLive）

クロード・ドビュッシー（1862～1918）： 交響詩「海」（管弦楽のための3つの交響的素描）

クリスティアン・ティーレマン指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団
（2002.3.23 ルツェルン・コンツェルトサークルでのLive）

*** 休憩 ***

デモスト・ムソルグスキー（1839～1881）： 交響詩「はげ山の一夜」

ヴァレリー・ゲルギエフ指揮ウィーン・フィルハーモニー交響楽団
（2002.4.28 ウィーン・ミュージクフェラインサークルでのLive）

ニコライ・リムスキー=コルサコフ（1844～1908）： 交響組曲「シェエラザード」

ネーメ・ヤルヴィ指揮ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団
（1987.10.4 サントリーホールでのLive）

★ホームページアドレス <https://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/>

曲目解説

リスト：交響詩“前奏曲（シ・プレリュード）” S.97

フランツ・リストは、1811年10月22日、ハンガリーのエステルハーゼ侯領のライディングで生まれました。はやくから天才的才能が芽生えていたリストは、6歳のときからピアノを習い始め、1820年9歳の頃には演奏会を開き、新聞記事になるほどの天才ぶりを発揮しました。1822年ウィーン音楽院でベートーヴェンの弟子であったチェルニーに学び、卓越した技巧を持つ名ピアニストとして、ヨーロッパ各地で華やかに活躍、“ピアノの魔術師”と呼ばれるようになり、多くのピアノ作品の名曲を残しました。1847年9月の演奏を最後にピアニストとしてのキャリアを退き、1848年、以前から関係のあったワイマール宮廷楽長に就任、指揮活動と作曲に専念するようになりました。ベルリオーズが確立させた“標題音楽”をさらに押し進めた“交響詩”という新しい音楽を創始したのもリストでした。これは「管弦楽によって詩的、あるいは絵画的内容を表現するもの」で、**交響詩“前奏曲”**は13曲あるリストの交響詩の3番目にあたります。最初1848年に「4つの元素」という合唱曲に使われた主題を用いて作曲され、これを交響詩として改訂する際に、アルフォンス・ド・ラマルティエヌの「詩的瞑想録」からとられた詩を標題として付加しています。それは“人生は死への一連の前奏曲である”というもので、1854年に完成、その年にワイマールで初演されました。第1部「愛」、第2部「嵐」、第3部「牧歌」、第4部「戦い」の4つの部分からなる、リストの代表的な交響詩の傑作です。

ドビュッシー：交響詩“海”（管弦楽のための交響的素描）

1862年8月22日にフランスのサン＝ジェルマン＝アン＝レーで生まれたドビュッシーは11歳でパリ音楽院に入学、1884年にカンタータ「道楽息子」でローマ大賞を受賞。その後長調、短調という調性的な和声法から抜け出し、もっと自由でさまざまな旋法を駆使した独自の世界を作り上げ、印象主義という手法を確立し、20世紀音楽の窓を開けた作曲家とも言われています。**交響詩「海」**は歌劇「ペレアスとメリザンド」を完成した翌年1903年に着手、1905年に完成し、同年10月15日にパリにおいて初演されましたが、評判は芳しいものではなく、1908年1月12日にドビュッシー自身の指揮、コロヌ管弦楽団による再演の大成功によって、ようやくこの曲の真価が認められるようになりました。ドビュッシーの部屋には葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」が飾られていたり、日本美術についてのレクチャーも受けたとされていて、この作品は北斎の浮世絵にインスピレーションを得て作曲されたのではないかとされる事もあります。今日まで明確な関連性は確認されていません。この曲は単なる描写音楽ではなく、海の流動的なかたちを借りて、一瞬の印象を音のイメージとして表現した名作です。

第1楽章 海上の夜明けから真昼まで 第2楽章 波の戯れ 第3楽章 風と海との対話

ムソルグスキー：交響詩“はげ山の一夜”

1839年3月21日にロシアのカレヴォで生まれたムソルグスキーの家系は古いロシアの貴族で、広大な領地を所有する地主でした。少年時代に母からピアノの手ほどきを受け、7歳でリストの小品を弾いたと言います。ピアノが上達して行くと即興演奏が得意となり、作曲理論は学ばなかったにもかかわらず、自己流で作曲を試みるようになりました。1851年に入った陸軍士官学校を1856年に卒業後、陸軍病院勤めをしていたポロディンと知り合い、さらにキュイ、バラキレフを知り、のちにロシア国民学派の「五人組」に加わりました。**交響詩「はげ山の一夜」**は最初、1858年に歌劇「ノロチンスクの市」の間奏曲として着想され、劇中に出てくる悪魔の饗宴を描いています。それは「聖ヨハネ祭の前夜、深夜になるとはげ山に地霊チエルノボーグが現れ、手下の魔物や幽霊、精霊たちが大宴会を開いて大騒ぎするが、やがて夜明けを告げる鐘の音とともに精霊たちは去り、はげ山はいつもと変わらぬ静かな朝を迎える」というもので、1867年に完成されました。その後何度か書き直しもしていますが、いずれもムソルグスキーの生前には演奏されませんでした。今日多く演奏されるのは、ムソルグスキーの死後、リムスキー＝コルサコフによって修正された版ですが、20世紀に入ってムソルグスキー自身の手による原典版が再発見され、こちらも演奏される機会が増えてきました。交響詩の名曲のひとつです。

リムスキー＝コルサコフ：交響組曲“シェエラザード”

リムスキー＝コルサコフは、1844年3月18日にロシアのティハヴィンで貴族系の家に生まれました。6歳でピアノを始め、9歳で作曲を試みるほどの楽才がありましたが、一族に海軍の軍人が多かった関係で、1856年、12歳で海軍兵学校に入学し、6年間を過ごしますが、ここで本格的な芸術音楽に接した彼は、1861年、ピアノを学んでいたカニシの紹介でバラキレフと出会い、ロシア国民学派の「五人組」の仲間に加わりました。バラキレフの指導を受け、交響曲を書きますが、自身の不満から後年改訂、作曲家として立つ決意を固めたのは1873年に初演された歌劇「プスコフのおとめ」が成功してからでした。1871年にサンクトペテルブルク音楽院の教授に任命されても、作曲の理論的知識や技法の不足を補うために和声法や対位法を研究し続け、管弦楽法の理論書「管弦楽法原理」という著書を残すほどの大家になっていきました。**交響組曲“シェエラザード”**は1888年8月に完成、その年の10月にサンクトペテルブルクで初演されました。千夜一夜物語（アラビアンナイト）の語り手シェエラザードによる4つの話は必ずしも、すべてが千夜一夜物語のストーリーを音楽表現している訳ではありませんが、華やかな管弦楽法とオリエンタリズムの手法が見事に活かされた傑作として親しまれ、広く演奏されています。

第1曲 海とシンドバッドの船 第2曲 カランダール王子の物語 第3曲 若い王子と王女
第4曲 バグダッドの祭り、海、青銅の騎士のある岩での難破、終曲